

シュミットの有機論に関する研究

——企業観と貸借対照表観——

長谷川 美千留

要旨

Schmidt の展開する有機的時価貸借対照表論、すなわち有機論は、静態論ならびに動態論とともに、会計学説において重要な地位を占めている。本稿においては、その有機論における企業観と貸借対照表観の概要を検討している。

企業は総合経済の中に絡めとられた存在であり、そのような存在である限り、企業は独自に、その最終的価値を決定することは出来ない。企業が総合経済との関係性を無視して、単独で価値測定をすることに意味はないのである。企業は総合経済から価値を取り入れ、企業は再び価値を総合経済に吐き出す。この価値の差額は企業体の利益であり、企業は価値循環装置のように機能する。総合経済と企業は、常に有機的かつ相対的な関係を維持しながら存在するのである。

キーワード：有機的時価貸借対照表・有機論・シュミット

1. はじめに

本稿においては、F.Schmidt (以下 Schmidt とする) の著作『有機的時価貸借対照表 (Die organische Tageswertbilanz)』を中心に、その企業観と貸借対照表観の概要を検討する。Schmidt は 1921 年『経済における有機的貸借対照表 (Die organische Bilanz im Rahmen der Wirtschaft)』を著し、翌年にはその続編 (第 2 版) を公表した。1929 年には『有機的時価貸借対照表』(第 3 版) を公表し、この著作は 1951 年に復刻されている。本稿で取り扱うのは、この 1929 年公表第 3 版 (復刻版 1951 年版) である。

Schmidt は当初、インフレーション下の経営問題について、強い関心を示していた。しかし、徐々にその関心は貸借対照表の根本的な問題と時価計算へと移行していった。時価貸借対照表という名称に関連し、Schmidt は「時価貸借対照表 (Tageswertbilanz) という補足 (Zusatz) を通じて、そのタイトルは拡張され (erweitert)

ており、これに伴い内容も拡張している。(内容の拡張とは：引用者) 一方では、個別問題 (Einzelfragen) について理論的に深めることであり、他方では計算に関する実践的な貫徹 (die praktische Durchführung der Rechnung) を容易にすることである (Schmidt [1929/1951] 第 3 版序文)」また、「ここに示した時価計算 (Tageswertrechnung) は永遠に続く問題 (ein Dauerproblem) である (Schmidt [1929/1951] 第 3 版序文)」と述べている。

企業を経済における一細胞とみなす思考は、Schmidt の展開する有機論の特徴の一つとされる。しかしこの点について、市原は「Nicklisch がそうである如く、Schmidt もまた経営を国民経済の細胞にたとえる。このことは Schär 以来のドイツ経営学の伝統ともいいうる (市原 [1961]179 頁)」と述べている。

当時のドイツは「国民経済と同様、経営経済もまた戦争と革命を通じて、その根底が危うい (Grundfesten erschüttert) (Schmidt [1929/1951]

S.1)」状況であった。Schmidt は「このような残骸 (aus solchen Resten) から新しい国土(neues Land)、新しい基盤(neues Grund)が創造される (Schmidt [1929/1951] S.1)」と述べる。破壊された国土と覆された既存の社会基盤から、今まさにドイツ経済を新たに構築しなければならないという Schmidt の意志が伝わってくる。

2. Schmidt の企業観

Schmidt は冒頭、企業について次のように、述べる。「企業は真空の空間 (luftleeren Raum) に活動するものではない。それは、市場経済の網 (Nets der Marktwirtschaft) の中に絡めとられ、つなぎ留められている (eingespannt) (Schmidt [1929/1951] S.1)。」この表現は、Schmidt の企業に対する象徴的イメージである。企業は、単体で独立の組織として存在するのではない。さらに、この eingespannt という言葉は、何かに挟み込まれた、また、望ましくない状況に組み込まれた、というやや消極的な印象をもつ表現である。市場経済の網に絡めとられた企業体というイメージが、相対的ならびに有機的という言葉の根底にある。企業と市場経済は、切り離せないものなのである。インフレーション期のみならず、市場経済は常に変化するものであり、そこに存在する企業と市場経済の相互関係を理解せねばならない。

企業について Schmidt はまた、次のように述べる。「企業が孤立して存在するということが、すなわち、総合経済に対する、その (企業の) 生存にとって重要な関係性 (lebenswichtigen Beziehungen) をないものとして、考察をするという過ち (Der Fehler) は回避されるべき (Schmidt [1929/1951] S.1)」である。企業は総合経済との関係性の中で把握されるべきであり、企業が生存し存続するためには、総合経済との関係性の考察は不可欠である。

総合経済と企業との関係性について、Schmidt は繰り返し、異なる表現で同様の考え

を示している。「総合経済の有機体の中で (In Organismus der Gesamtwirtschaft)、企業は消費者が営む家庭経済 (die Hauswirtschaft des Konsumenten) と同様に細胞 (Zelle) である (Schmidt [1929/1951] S.47)」。そして、この細胞は「全体 (Ganzen) の中でのみ生きることができ、またこの全体は活ける細胞 (lebenden Zellen) によって存在 (Schmidt [1929/1951] S.47)」するのである。企業は総合経済を構成する要素であり、また総合経済は企業という構成要素から成るのである。そして、「国民経済学者は総合経済の生活上の様々な事柄 (den Lebenserscheinungen der Gesamtwirtschaft) から出発せねばならない (Schmidt [1929/1951] SS.47-48)」のである。

市場経済における企業という章の中にも、同様の表現が見られる。「いずれの企業も、市場を通じて、総合経済の中に何千にも絡み合い、もつれあい (tausendfältig verflochten) 存在している。(企業は) その価値を受け入れ (empfängt ihre Werte)、またその価値をあるべき方向へ導く (führte) (Schmidt [1929/1951] S.30)」と Schmidt は述べている。verflechten という用語の絡み合う、編み込む、纏れ合う、巻き込むという語句と tausendfältig の千回重ねるという表現は、総合経済の中にただ浮くように存在する企業体ではなく、網に絡めとられた企業のイメージを表現している。

つまり、企業は総合経済の中に絡めとられた存在であり、そのような存在である限り、企業は独自に、その最終的価値を決定することは出来ない。企業が総合経済との関係性を無視して、単独で価値測定をすることに意味はない。また企業は、総合経済の中から価値を受け入れ、また同時にその価値を望ましい方向へ振り向け、そして導く、価値循環装置なのである。

Schmidt は、過去から現在という歴史的な展開を理解したうえで、「我々 (ドイツ国民: 引用者) の経済の新しい分類 (Neugliederung) の

ための明確なプログラム (ein klares Programm) (Schmidt [1929/1951] S.1)」が必要であると主張する。ドイツという国家の危機に直面した企業経営者たちは、市場経済と企業の密接な関係を理解しなくてはならなかったのだろう。企業経営者が市場経済の動向と密接な関係性を理解しないことは、「船長 (Kapitän) が海流 (Meereströmungen) の知識を持たないこと (Schmidt [1929/1951] S.2)」と同じである。海は市場経済、海流は市場経済の動向、船長は経営者である。確かに、海流は船の運航に影響を与えるであろう。しかし、船に、もしくは船長に、大海原の海流を変えるような偉大な力があるだろうか。

Schmidt によれば、企業が孤立している状態 (die Unternehmung isoliert) は過ちであり、「すなわち、企業の存続にとって重要な総合経済との関連無く、考察をするという事は回避されるべき (Schmidt [1929/1951] S.1)」なのである。企業の孤立とは、企業と総合経済が切り離された状況で考察されることを意味する。「企業はそれ自身独立した組織体 (ein selbständiger Organismus) (Schmidt [1929/1951] S.31)」であるが、市場価値を受け入れ、また流出させる装置でもある。「市場価値の受け入れと市場への再返還 (Wiederzurückstellung) の間には時間と景気変動が存在している。(Schmidt [1929/1951] S.32)」

そして、企業は価値の流れ (Strom) の中に存在している。一般に、経営者は安価な財を入手し、それを高値で販売することに努力するであろう。しかし、このような試みは「景気に移り変わる (wechselnder) とき、または継続的な景気上昇 (dauernd steigender Konjunktur) に際してのみ、可能 (Schmidt [1929/1951] S.32)」である。そして、「経営者はあらゆる経営価値 (alle Betriebswert) が、どのように市場価値 (Marktwerten) に左右されるかを認識せねばならない (Schmidt [1929/1951] S.32)」と Schmidt は述べている。

経営者には「高度な費用認識 (hohes Kostenbewußtsein) (Schmidt [1929/1951] S.32)」が必要であり、また「適正な計算 (richtiger Gewinnberechnung) (Schmidt [1929/1951] S.32)」を重要としている。「その都度その都度、生産の拡張または縮小、いずれが正しいかは適正な計算 (richtiger Gewinnberechnung) に依拠しており、利益の基準額 (die Maßstäbe des Gewinn) は重大な意義 (so großer Bedeutung) を持つ (Schmidt [1929/1951] S.32)」のである。

「経済活動を営むという事は、すなわち、価値があるということ (denn wirtschaften heißt werten) である。また、経済活動を営むということはまた、その価値に関してはいかなる手段でも、いつ何時でも、自由に扱うこと、意のままにすることができるということ (Schmidt [1929/1951] 第3版序文)」である。つまり、経済活動は価値に起因するのだ。「すべての企業の成果 (Aller Unternehmungserfolg) とは、この価値の差異 (Wertdifferenz) (Schmidt [1929/1951] 第3版序文)」に他ならない。取り入れた価値と吐き出した価値の差額こそ企業体の利益であり、その企業自体の細胞としての意義、またはその存在に対する相対的評価なのである。換言すれば、社会や経済に対する企業の貢献度を意味しているのである。企業が市場から価値を受け入れ、その価値を市場に再度流出するまでの間に時間が流れ、インフレーション期であれば激しく景気は変動するのである。企業は、いわば価値循環装置なのである。

時間と景気変動を内包した価値と価値の差異から導かれる適正な計算は、重要である。なぜなら「適正な計算 (richtigere Rechnung) がその瞬間ごと (nur das in jedem Augenblick) に実在する真のもの (wirklich) を利益として (als Gewinn) 表現している (Schmidt [1929/1951] S.29)」からである。総合経済から受け入れた価値を、企業は再度、総合経済へと放出する。総合経済から企業への流入価値と流出価値を

記録することが、「企業体の会計制度 (das Rechnungswesen des Betriebs) (Schmidt [1929/1951] S.30)」である。

この企業体の会計制度においては、この価値と価値の差異を測定するのであるが、そこで生じる問題は、従来の方法では「二つの種類の価値変動 (die beiden Arten der Wertveränderungen) について、区分して把握するということが不可能 (nicht möglich) (Schmidt [1929/1951] S.30)」であったという事である。企業体の個々に生ずる価値変動を細分化し、把握することが重要と考えるならば、従来の会計ならびに計算制度は不十分である。二種類の価値変動を区分して把握することができない従来の会計制度を Schmidt は否定している。beiden は単なる「二つ」ではなく、「対」になる「両者」、対応関係を暗示している。「従来、企業体の会計制度 (das Rechnungswesen des Betriebs) は、流入価値 (Eingangswerte) として基本的に調達価額 (die Anschaffungspreise) を、そして流出の際には売却価額 (beim Ausgang die Verkaufspreise) を記帳してきた。これらの価額は容易に知ることができる金額であるが、そのことは既に多くの厄介な問題 (manche Schwierigkeit) (を引き起こしてきた (Schmidt [1929/1951] S.30)」のである。

Schmidt は、「経営上の価値物 (Betriebswerte) は、二つの原因により変動する (Schmidt [1929/1951] S.30)」という。言い換えれば、企業利益に影響する二つの要因ということであろう。一つは「経営体の経済性 (Wirtschaftlichkeit des Betriebs) (Schmidt [1929/1951] S.30)」に起因する原因、二つ目は「市場の変動の基づく (auf Grund von Marktveränderungen) (Schmidt [1929/1951] S.30)」ものである。

従来の会計手法では、「企業の純利益の総額 (den Gesamtreingewinn der Unternehmung) を、その販売による利益ならびに経営上の利益 (Umsatz-oder Betriebsgewinn) に構成要素ごと

分解すること (zerlegen) は不可能である。また、固定資産 (ruhenden Vermögen) については、流入日と流出日の間の価値上昇 (Wertsteigerung) について、(逆の場合、経営上の損失と価値減少)、これらを基本となる構成要素ごとに、分解 (解体) する (zerlegen) ことも技術的に不可能である (Schmidt [1929/1951] S.31)」という。

企業体が市場価値の受け入れ、再度、市場にその価値を放出する際、その両者に間には「時間と景気変動 (Zeit und Konjunkturbewegung) (Schmidt [1929/1951] S.32)」が存在するという。つまり「市場価値の受け入れ (der Aufnahme solcher Marktwerte) とその価値を市場に再返還 (Wiederzurückstellung) の間には、時間と景気変動が横たわっている (Schmidt [1929/1951] S.32)」のであり、この景気変動は企業の利益に大きな影響を及ぼすのである。

例え、顕著なインフレーションが生じていなくとも、市場価値や貨幣価値は微かに変動する。均一な市場価値、均一な貨幣価値は、仮定であり、また想定であり、決して現実ではない。「市場価値ならびに貨幣価値が同じ様に留まっているということは無い (nicht der Fall ist, einen gleichbleibenden Markt- und Geldwert) ののである。(Schmidt [1929/1951] S.31)」

比較的景気が安定している時期とはいえ、その市場価値や貨幣価値は一定ではない。その現実を受け入れれば、個々の企業体に、常に様々な価値変動、経済の呼吸のような影響がその都度及ぶことになる。Schmidt はこのような状態を「経営の経済 (Betriebs ökonomik) (Schmidt [1929/1951] S.31)」と考えている。これは、企業体の営む経営に、総合経済の影響が、その都度及ぶことを意味している。損益計算書においても、その計算の中には、各々の瞬間における様々な価値が混入している。企業利益には、常に、時間と景気変動の影響が存在し、それをいかに扱うかという課題が常に在る。従来の計算について Schmidt は次のように

述べる。「従来の貸借対照表そして損益計算書については、市場価値から出発し、この計算の中には異なる時間価値(anderen Zweitwert)が混在している (Schmidt [1929/1951] S.31)」であり、「概して、景気循環の影響 (der Einfluß der Konjunktur) と経営の経済 (Betriebsökonomik) の影響とを、切り離し区分することはない (Schmidt [1929/1951] S.31)」のである。

測定時点、取引の発生時点、様々な時間の価値が混在しているのである。このことは、Schmidt の適正な計算の阻害要因になる。「経営体の経済 (Betriebsökonomik) (Schmidt [1929/1951] S.32)」という用語は、経営体すなわち企業における不適正な計算が経済に与える影響、それらの影響が明確に分離されないことを暗示的に表現している。

価値の循環と企業利益について、Schmidt は次のように考える。企業利益への影響は、次の好ましい (günstigen) 場合と好ましくない (ungünstigen) 場合である。「好ましい場合とは、流入する際に価値が相対的に低く (die Werte bei Eingang relative niedrig)、流出する際に価値が相対的に高い (bei Ausgang relative hochstehen) 場合である。好ましくない場合とは、流出の際に相対的に (価値が：引用者) 低い場合である。(Schmidt [1929/1951] S.32)」

この価値循環装置としての企業という思考をもとに、その生産性の適正化が重要であると Schmidt は考える。企業は市場における価値循環装置として機能する。企業は一つの組織体であり、その存在は市場から受け入れた価値を高め、またその価値を市場に放出する役割を持つ。この価値の循環という運動の間に時間は経過し、その時間の経過の中に貨幣価値変動や景気変動が生じるのである。

そして、「企業を観察するために企業を以下の三つに区分する (Schmidt [1929/1951] S.32)」。

1. 正常な発展をしている企業

Die Unternehmung mit normaler Entwicklung)

2. 正常な発展を下回る企業

Die Unternehmung mit unter normaler Entwicklung)

3. 正常な発展を上回る企業

Die Unternehmung mit über normaler Entwicklung

この区分の内容は、「正常という概念の解釈 (Interpretation des Begriffes normal) に左右される (Schmidt [1929/1951] S.33)」という。企業は総合経済の中の相対的な関係性で理解されねばならない。正常とは「総合経済におけるその相対的立場 (relative Stellung) が同じ状態ににとどまっている (die gleiche geblieben sei) (Schmidt [1929/1951] S.33)」ことを意味している。

「多くの関係性 (vielen Beziehung) の中に存在する企業は、総合経済的 (gesamtwirtschaftlich) に判断されねばならない、と明確にすること (Schmidt [1929/1951] S.32)」は、Schmidt にとって大変重要であり、「過去に展開された貸借対照表法 (Bilanzrecht) や貸借対照表に関する慣習 (Bilanzgewohnheiten) は、あくまで安定した貨幣制度 (stabiler Währung) を踏まえて型取られたもの (zugeschnitten) であり、これらは非常に不十分 (vielm unzureichend) なもの (Schmidt [1929/1951] S.34)」なのである。

3. 有機的貸借対照表観

Schmidt は「有機的貸借対照表 (Die organische Bilanz) は、インフレーションによる貨幣価値下落 (der Geldentwertung) の時代に発生した (Schmidt [1951] 序文)」と述べる。

Schmidt は 1922 年 (第 2 版出版時) の序文において、この時期に活躍していた Schmalenbach や Mahlberg の動向¹⁾についても

¹⁾ この頃、Schmalenbach は Mahlberg とともに、機能を失った紙幣マルクから金マルクへ

の転換を主張していた。1923 年 12 月 28 日、

触れ、「貨幣価値下落時における貸借対照表の適用問題 (In der Frage der Anpassung der Bilanzen in die Geldwertung) (Schmidt [1929/1951] 序文)」に際し、彼らにより「多くの実践的な価値のある進歩 (mancher praktisch wertvolle Fortschritt) が達成された (Schmidt [1929/1951] 序文)」と述べ、一定の評価をしている。Schmidt は、Schmalenbach たちの主張する金マルク貸借対照表に対し、「この提案 (Diese Vorschläge) は、一般指数の適用による貸借対照表修正を行うという思考に基づき構築されている (Schmidt [1929/1951] 序文)」と述べている。

そして、「有機的時価貸借対照表 (Die organische Tageswertbilanz) は、商人的計算制度のもと、広範囲に及ぶ貸借対照表の真実性 (Bilanzwahrheit) および貸借対照表の明瞭性 (Bilanzklarheit) のため、経済的思考 (ökonomischen Denkens) 経営構造および資本構成 (der Betriebs- wie Kapitaldisposition) を形成するために有効な手段 (Schmidt [1929/1951] 序文)」であるという。

有機的貸借対照表観、すなわち有機的な貸借対照表の理解、解釈とはいかなるものなのであろうか。「有機的貸借対照表観 (die organische Bilanzfassung) は、企業の取引プロセスの詳細な調査 (auf der Durchleitung des Umsatzprozesses der Unternehmung) に基づく綿密な貨幣理論 (geschlossenen Geldtheorie) の上に構築される (Schmidt [1929/1951] 第 2 版序文)」と述べている。また具体的には「取引日における製品の補償価値のための計算 (Kalukulation zum Ersatzwert des Fertigprodukts am Umsatztag) による財産計算と成果計算の分離と企業の価値均衡 (der Wertgleichheit) ならびに相対的

価値維持 (der relative Werterhaltung der Unternehmung) の原理に基づき構築される (Schmidt [1929/1951] 第 2 版序文)」のである。

Schmidt の展開する有機論は、財産計算を重視する静態論、損益計算を重視する動態論いずれとも異なり、財産計算、損益計算いずれも重視する。「経営上の財産を算出して確定する事 (ermitteln) と同様に、その成果を確定すること、いずれも不可欠 (notwendig) である (Schmidt [1929/1951] S.81)」ことは間違いなし。静態論にせよ、動態論にせよ、二つの目的を同等に扱うことはしない。したがって、貸借対照表の目的に際し、おのずと財産計算か成果計算か、いずれかに重点が置かれることになる。その最たるものが、Schmalenbach により展開された動態論であり、そこでは損益計算の優位性が重視された。しかし、Schmidt の考えは異なる。「私 (Schmidt : 引用者) はこれに対し本質的に異なる考え、すなわち財産計算と成果計算のいずれも (nämlich die des Sowohl als Auch) (Schmidt [1929/1951] S.81)」重要であると考えます。

有機論の特徴は「財産計算と成果計算の分離の原則 (die Grundsätze der Trennung von Vermögensrechnung und Erfolgsrechnung) に基づいて構築されている (Schmidt [1929/1951] 第 2 版序文)」のである。この Trennung という表現には、本来は一体を成し、結合しているものを、あえて分離する、切り離すというニュアンスが表現されている。このことは有機論の大きな特徴でもあるが、それと同時に、なぜ静態論や動態論はいずれかに重点を置いたのか、おこななければならなかったのか。正しい財産計

金貨貸借対照表令 (Die Verordnung über Geldbilanzen) が発令され、金マルク会計に基づいた貸借対照表の作成が求められることになる。この時期すでに新通貨としてレンテン・マルクが流通していたが、このレンテン・マルクは、土地をその裏付けとするもの

であり、通常の通貨とは異なる。紙幣マルクから金マルクへの転換に際し差額の処理という問題が生じていた。Schmidt が活躍したのは、このように国家を挙げて大掛かりな金融ならびに会計の立て直しが模索されていた時代である。

算と正しい成果計算、二つの目的は同時に等しく果たせるものなのか、という根本的な課題がここに示されるのである。

Schmidt は、既に触れたように、Schmalenbach の見解を意識しており、著述の中でも、彼の名が幾度となく出てくる。Schmidt は企業と経済の関係性を踏まえた研究の意義を唱え、その一例として 1919 年の Schmalenbach の原価計算の論文も評価している。「経営経済学者のこのような行動は、学術的な知識 (wissenschaftlichen Erkenntnis) をまさに有用なもの (förderlich) (Schmidt [1929/1951] S.2)」という。このような行動とは理論的国民経済学 (der theoretischen Volkswirtschaftslehre) の分野とされた市場経済や貨幣経済の基本的な問題、すなわち需要と供給や貨幣価値、景気などについて、経営経済学の分野からも研究することを意味している。経済学の領分とされた領域にも経営学者がその実践的な知識をもって、踏み込むべきであるとの信念が表れている。

貸借対照表について「いずれの貸借対照表も静態的 (statisch) である。なぜなら、貸借対照表はある (Zustand) 状態を把握するものであり、それ以外の何物も把握できないからである (Schmidt [1929/1951] S.46)」と述べている。そして、貸借対照表の本質について、「このような意味においては、Schmalenbach は、動態的貸借対照表ということではできなかったであろう (Schmidt [1929/1951] S.46)」と述べる。

貸借対照表の本質は、静止状態を表すものである。そして、正しい財産計算無くして、正しい損益計算はあり得ないのである。取引というものは、財産に何かしらの変動をもたらす。この、取引によって変動する動きを踏まえ、その瞬間をとらえる。その時点における、正しい評価額に基づき、正しい財産計算を行う。また、それに伴い計算される損益計算でなければ、いずれも誤った計算になる。Schmidt は、適正な計算 (eine richtige Rechnung) に固執し

ている。「適正な計算のみが、その特定時点における (瞬間の) 利益を表すのであり、それこそが真実、現実 (wirklich) なのである (Schmidt [1929/1951] S.29)」。この適正な計算については、前文でもふれている。「しばしば批判された資本主義の過度の (病的な) 発展 (kritisieren Auswüchse des Kapitalismus) は、以下の場合、不可能であろう。それは、適正な計算 (richtig gerechnet) がなされる場合である (Schmidt [1929/1951] 前文)」。適正な計算について、Schmidt は収益計上時点における費用補填、すなわち費用の時価計上を考えている。収益認識時点と費用認識時点の対応を主張している。費用の過去の取引に基づく客観性よりも、収益認識時との同時性を重視している。財産計算のみならず、成果計算においても時価を取り込む。過去に計上された費用と取引日の時価による費用の差額を取り除くのである。

そして、一般的には不況や恐慌など経済現象は自然現象 (Naturereignissen) のごとくに理解されるが、Schmidt はその原因として、「企業経営における計算の誤り (Rechenfehler) に帰結する (Schmidt [1929/1951] S.29)」と考えるのである。これにより以下の経済的効果があるという。「このような計算方法は、後で説明するが、生産と消費の均衡した運動 (Gleichlauf von Produktion und Konsumtion) を確実なものとする (Schmidt [1929/1951] S.28)」のである。その一方でいわば、不適正な計算が商人的計算 (kaufmännischen Rechnung) である。なぜなら「実際の費用 (wirklichen Kosten) と補償費用 (Ersatzkosten) との差額こそが、見せかけの利益 (Scheigewinn) (Schmidt [1929/1951] S.28)」だからである。商人的計算は、インフレーションがもたらす歪みを内包している。さらに、この歪みは、誤った企業行動の原因となり、更なる歪み、すなわち恐慌を深刻化させる。

Schmidt は Statik, Dynamik und Organik と題し、動態的、静態的、有機的という概念について触れている。物理学的に見て、静態的と動態

的の境目は、不明確であるとする。「静態的そして動態的の間の境界線は疑いの余地もなく (zweifellos) 鮮明ではない (weniger scharf) (Schmidt [1929/1951] S.45)。「静態的、動態的、そして有機的思考が意味しているのは、経営経済学的な事象についての全く既知の観察法 (eine ganz bestimmte Betrachtungsweise) (Schmidt [1929/1951] S.45)」に過ぎないのである。

「現代の物理学において、静態は動態の下位概念 (Unterbegriff) である。それは、自然界において、静止の状態 (Zustand der Ruhe) は存在しないということを研究が明らかにしたからである。(Schmidt [1929/1951] S.45)」自然界に静止状態はない、静態はいわば動態に内包される一時的な均衡状態と把握している。静態というのは「二つの異なる作用をする力 (die verschiedenen wirkenden Kräfte) が、相互に均衡している (gegenseitig ausgleichen) (Schmidt [1929/1951] S.45)」に過ぎないのである。まさに静態とは、「均衡状態 (Zustand des Gleichgewichts) (Schmidt [1929/1951] S.45)」なのである。

Schmidt は静態的という状況について、物理学的のみにならず、国民経済的にも、それは (外観的には存在しているように見えたとしても)、実質的には存在しないと考えている。静態的とは、均衡状態または平均化された状態であり、このことが物理学上、静態的という概念が、動態的という概念に対し、下位概念であることの理由であるとする。Schmidt はこのように物理学の思考を経営経済学に応用することについて、Linhardt の貢献を挙げる。

Schmidt は、静態的という概念と動態的という概念を、ともに存在する、対立する概念とは把握していない。静態は状態に過ぎず、力学の中の表面的かつ仮定としての状態なのである。この解釈が顕著に表れるのは、Schmpeter の経済考察に関する次の記述である。

「これに類する解釈は、Schmpeter の考えに見

出すことができる。静態的という概念 (mit dem Begriff der Statik) を用いて、均衡の中にいつまでも留まっている (im Gleichgewicht beharren) ものとして、国民経済を扱う (Schmidt [1929/1951] S.45)」のである。自然界及び経済の中に、静態という停止状況は存在しない。「静止状態として、静態を経済的に関連付けることは、過ち (falsch) である。なぜなら、それは不可能 (nicht möglich) であるからだ。(Schmidt [1929/1951] S.45)」

静態、動態という思考は、貸借対照表に用いられているが、静止の状態は、自然界にも経済にも存在しない、不自然な仮定なのである。そして、動態がいわば自然の状態であり、静態という状態は過程であり、想定であり、概念上のものに過ぎない。Schmidt はこれを「思考された静止状態 (gedachten Zustand der Ruhe) (Schmidt [1929/1951] S.45)」また「即席造語 (Augenblicksbild) (Schmidt [1929/1951] S.45)」と表現し、思考や概念の中で作り出されたに過ぎない、その一瞬を写像する言葉とみなしている。

貸借対照表の本質は、静態的である。その一方で、「一般的に、国民経済においても、経済における停止状態というものはないのだ。経済というものは、原則的に活動を意味している。(Schmidt [1929/1951] S.45)」活動状態とは、何かを何かに転換、変換すること (unsetzen)、売買することを意味している。

貸借対照表は、本来は存在しない思考された静止状態、すなわち静止画を何枚も撮影し、これをコマ送りすることにより、その動態を把握しているに過ぎない。このことを「個々の写像の途切れることのない連続的観察 (ein fortlaufendes Beobachten) (Schmidt [1929/1951] S.46)」と Schmidt は表現している。これは経済的な動きを認識するための、あくまで間接的かつ副次的な手段に過ぎない。

Schmidt は、このような貸借対照表への考察について「Oppenheimer のいう比較静態概念

(Begriff der komparativen Statik) (Schmidt [1929/1951] S.46)」を用いて説明する。「重要な意味における比較静態は、経済的な動きを認識するための補助的な手段 (Hiffelmittel) にならざるを得ない (Schmidt [1929/1951] S.46)」のである。Schmidt の展開する有機的という概念は「静態、動態という概念とは、異なる出発点 (anderen Ausgangspunkt) を持つ (Schmidt [1929/1951] S.46)」ものなのである。

経営者に課された課題 (Der Unternehmer hat zur Aufgabe) について Schmidt は企業を船舶に例えている。企業は船であり、経営者はその操舵手である。「その船 (das Schifflein) を、価値の転換 (Wechsel der Werte) の中を貫いて操舵し、進む (hindurchzu steuern) (Schmidt [1929/1951] S.87)」のである。

企業は総合経済の中で、価値を受け入れたり、放出したりしているが、「すべての価値の出発点 (Ausgangspunkt) は市場価格 (Marktpreis) なのである (Schmidt [1929/1951] S.87)」。この市場価値は「生産とそれからもたらされる収益 (Production und ihres Ertrages) に作用すると同様、財産の側面 (Vermögensseite) にも作用する (Schmidt [1929/1951] S.87)」。

Schmidt は有機的貸借対照表観に関する記述の最終部分で、以下のように述べている。

「有機的貸借対照表にとって、最も重要な価値 (der wichtigste Wert) は、貸借対照表日における再生産価値 (der Reproduktionswert dse Bilanztages) である。それ (再生産価値) はまさに、生存する企業の貸借対照表価値 (Bilanzwert) (Schmidt [1929/1951] S.89)」であるからだ。

様々な市場価値のうち、Schmidt は清算価値 (Der Liquidationswert) を望ましいと考えていない。なぜなら、一般的に売却価値は著しく低くなるわけで、このような価値は特殊な想定から導かれた価値である。売却価値は「再生産価値より低い (niedriger zu liegen pflegt als der Reproduktionswert) (Schmidt [1929/1951] S.89)」

のが通常である。「有機的貸借対照表観 (Die organische Bilanzfassung) は、結局 (auf die Gegenwart eingestellt) 現在志向の考え (Schmidt [1929/1951] S.89)」であり、企業や社会が抱える直視すべき問題に対応する貸借対照表が重要であり、総合経済的な視点から見た企業観や、貸借対照表目的の設定が必要となる。

Schmidt は「近年の貸借対照表に関する文献では、貸借対照表の目的 (Zweck)、貸借対照表に求められる意図 (Absicht) が、大きな役割を果たしている (Schmidt [1929/1951] S.53)」と評し、「これに反し、ここでは何かしら根本的な (gründlicher) 問題を扱い、そして目的の本質 (dem Wesen der Zweck) に関する探究をすべき (Schmidt [1929/1951] S.53)」と述べている。そして明らかなのは「すべての問題は一定の経済的問題に起因する (alle aus bestimmten wirtschaftlichen Fragen herauswachsen) (Schmidt [1929/1951] S.53)」ということである。Schmidt は、

企業体のみならず、貸借対照表についても経済的問題との関係性から考察する重要性を主張する。総合経済的視点ならびに価値という視点から、「貸借対照表が、あらゆる課題 (ganzen Aufgabe) に答えるには、その価値との関連性から (Beziehungen zum Wert)、経済ならびに市場貸借対照表 (wirtschaftlich und Marktbilanzen) でなければならない [1929/1951] S.53)」のである。

また、貨幣価値が安定した時代に展開された計算は適正なものではない。これらを適正な方向へ導く前段階として、企業の個々の価値物に生じる価値変動の影響を考慮しなければならない。そのためには、企業価値の分類が必要である。従来の分類は販売価値 (Umsatzwerte) と設備価値 (Anlagewerte) である。Schmidt は、これを否定はしないが「新たな概念 (die neuen Begriffe) として、貨幣価値 (Geltwerte) と実体価値 (Realwerte) を結び付けた (Schmidt [1929/1951] S.34)」概念を提

案している。

Schmidt は、実体価値と貨幣価値について以下のように説明する。「我々が認識するのは、貨幣価値 (Geltwerte) と実体価値 (Realwerte) という概念は販売ならびに設備価値という二つのグループ中に見出される (Schmidt [1929/1951] S.34)」。別次元の新たな概念を提示するわけではなく、従来の概念を若干異なる視点から分析しているに過ぎない。一つの例として、同じ資金であってもその資金が単なる貨幣として存在するならば貨幣価値であるが、もし当該資金が設備購入の準備資金であれば設備価値である。「貨幣価値 (Geldwerte) は、以下の場合には、設備財 (Anlagegüter) となる。それは、当該貨幣価値が、その設備の調達にとって不可欠の (notwendigerweise) ものとして拘束されている (verbunden sind) 場合である (Schmidt [1929/1951] S.34)」。

この新たな概念が重要なのは、市場の影響との関連においてである。「貨幣価値 (Geldwerte) ならびに実体価値 (Realwerte) は非常に異なる方法で、市場経済の影響 (den Einflüssen der Marktwirtschaft) の支配下にある (Schmidt [1929/1951] S.35)」という。

「前者 (貨幣価値物: 引用者) は貨幣単位 (die Währungseinheit) に結び付き、貨幣価値のあらゆる変動に影響される。一方、後者 (実体価値: 引用者) は財の市場価値 (dem Marktwert der Güter) に結び付き、その結果、市場経済の影響 (Einflüssen der Marktwirtschaft) に完全に服従する (unterworfen) (Schmidt [1929/1951] S.35)」ことになる。貨幣価値は貨幣価値の変動に大きな影響を受け、実体価値は財の市場価値に左右される。実体価値をめぐる問題は、とりわけ企業における費用計算の問題と結びつき、また総合経済的な視点からは消費者の行動、ひいては景気変動にも影響するという Schmidt の思考につながる。実体価値は「費用並びに消費者の側面の推移 (Kosten-wie auch der Verbrauchenseite) (Schmidt [1929/1951] S.47)」

に影響される。

企業は貨幣価値変動の悪影響を防ぐためには、費用計算の転換を図る以外にない。「過去の生産性関係 (Produktivitätsverhältnisse der Vergangenheit) (Schmidt [1929/1951] S.39)」ではなく、販売日の生産性関係への転換である。費用計算と生産性関係について、Schmidt は以下のように述べる。「生産性関係に基づく費用の探求 (Eine Ermittlung der Kosten auf Grundlage der Produktivitätsverhältnisse) は、各々の生産期間において、生産される (erzeug) 分がそのまま消費されるという結果 (Forge) (Schmidt [1929/1951] S.40)」に至る。Schmidt は、費用計算の正確性は、適正な生産に結び付くと考える。過去の生産性関係すなわち、過去のデータに基づく費用計算ではなく、販売日の生産性関係にも基づく費用計算を行うことで、過剰な生産を回避する。過剰なストックが市場価値を引き下げること回避するのである。

「生産と消費の同期作動 (der Gleichlauf) (Schmidt [1929/1951] S.39)」にとって「費用の探求 (Eine Ermittlung der Kosten) (Schmidt [1951] S.40)」すなわち費用計算は、景気変動を抑制する意味でも重要なのである。

Schmidt は、この貨幣価値 (Geltwerte) と実体価値 (Realwerte) という分類を用い、貨幣価値変動下における貸借対照表項目間の相対的關係性から、政策を施すことを経営者の課題 (Aufgabe) とみなしている。経営者が最善を持って対処すべき課題として、以下二つの課題が提示される。

1. 企業の相対的財産価値の維持
(die Erhaltung des relative Vermögenswertes der Unternehmung)
 2. 生産による財産の費消から最高の収益を得ること
(Einzielung des höchsten Erfolges aus der produktiven Verwendung dieses Vermögens)
(Schmidt [1929/1951] S.131)
- 企業の貸借対照表 (Die Bilanz der

Unternehmungen) について、貸借対照表における均衡について論じた部分で、以下のように述べている。「企業の貸借対照表は、積極側であれ消極側であれ、市場に関連付けられ、そして貨幣価値に関連付けられた価値、(in marktbedingte und geldwertbedingte Werte) 実体価値と貨幣価値から構成される (Schmidt [1929/1951] S.131)」。「積極側として (auf Aktiveseite) 把握される前者 (実体価値) は、設備全てである。他企業の株式 (Der Aktiven anderer Unternehmung) をも含む一方、他方では原材料、製品ならびに半製品を含んで (Schmidt [1929/1951] S.131)」おり、「消極側において (Auf der Passivseite) は、市場に関連付けられたという意味での実体価値 (Realwert im Sinne der Marktbedingtheit) は、自己資本 (das Eigenkapital) (Schmidt [1929/1951] S.131)」である。「実体価値のメルクマール (Das Merkmal der Realwert) は価値水準の推移 (den Verschiebungen des Price) に従うということ (Schmidt [1929/1951] S.131)」と定義される。貨幣性資産は負債により調達し、実体価値すなわち非貨幣性資産は自己資本により調達する。これが貸借対照表における価値均衡であり、貨幣価値の変動を相殺し、回避することができるのである。

4. むすびにかえて

Schmidt によって展開される有機的という概念は、静態ならびに動態とは、異なる出発点をもつ概念である。静態と動態の違いは、自然界の運動すなわち動態について、人為的に静止状態を想定し、描写したものが静態である。有機的とは総合経済との相関性、相関的動態によって、企業を把握する思考である。財産計算と成果計算 (損益計算) をともに重視する点も有機論の特徴である。

企業の経済活動は、すべて価値に起因するのである。企業成果はこの「価値の差異 (Wertdifferenz) (Schmidt [1929/1951] 第3版

序文)」に他ならない。総合経済から取り入れた価値と企業から吐き出した価値の差額こそ企業体の利益であり、その企業自体の細胞としての意義を表している。企業は、いわば価値循環装置なのであり、時間と景気変動を内包した価値と価値の差異から導かれる適正な計算が重要である。「適正な計算 (richtigere Rechnung) は、その瞬間ごとに実在する真のものを利益として表現している (Schmidt [1929/1951] S.29)」。

いかなる企業もまた、単独の、孤立した存在として活動しうるわけではない。なぜなら企業は、総合経済の中に幾重にもからめとられており、個別経済の観点からのみ考察するのでは、企業の価値をめぐる相対的な課題に立ち向かうことはできないからである。

経営者にとって重要な課題の一つは、企業の相対的な価値の維持であり、これは貸借対照表を用いた一種の財政政策でもある。また損益計算においては、過去ではなく現在の生産性関係を軸にした費用計算が重要となる。この費用計算の精緻化は、過剰在庫を防ぎ景気変動への間接的な抑制手段となる。

総合経済という全身体の中の一細胞である企業、それを繋ぐ血管と血流のような価値の流れが Schmidt の有機体のイメージである。景気変動と時間というエネルギーの影響を取り込みながら、総合経済の中で、一細胞である企業は、相対的な関係、均衡した関係を維持しようとする。このことは、全身体にとっても細胞にとっても、生存のために不可欠なホメオスタシスなのである。

参考文献

- Schmidt, F. (1921), *Die Organische Bilanz im Rahmen der Wirtschaft*. Leipzig.
 Schmidt, F. (1929/1951), *Die Organische Tageswertbilanz*. Wiesbaden.
 市原季一著『ドイツ経営学』森山書店 1961

年

上野清貴稿「有機的貸借対照表論の利益概念
1」『九州産業大学商経論叢』第 25 巻第 1 号

1984 年

上野清貴稿「有機的貸借対照表論の利益概念
2」『九州産業大学商経論叢』第 25 巻第 2 号

1984 年

佐藤芳次稿「F. Schmidt の有機的貸借対照
表論— (I) 評価論と Schmidt 説の意味—」

『熊本商大論集』第 31 巻第 1・2 合併号

1985 年

拙稿「有機的貸借対照表に関する一考察」

『環境創造』第 1 巻 7 号 2004 年

中田清稿「研究ノート シュミット有機観と
総合経済」『修道商学』第 20 巻第 2 号 1979

年

中田清稿「シュミットの有機的貸借対照表論」

『神戸学院経済学論集』第 33 巻第 4 号 2002

年

森田哲彌著『価格変動会計論』国元書房 1979

年

執筆者紹介 (所属)

長谷川美千留 八戸学院大学 地域経営学部

地域経営学科 教授